

生後4～5ヵ月児の泣き声に対する母親の反応

著者	田淵 紀子, 島田 啓子, 坂井 明美, 炭谷 みどり
雑誌名	日本助産学会誌 = Journal of Japan Academy of Midwifery
巻	12
号	3
ページ	76-79
発行年	1998-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/34913

doi: 10.3418/jjam.12.3_68

3. 生後4～5ヵ月児の泣き声に対する母親の反応

金沢大学医学部保健学科 ○田淵 紀子, 高田 啓子
坂井 明美, 炭谷みどり

I はじめに

乳児の泣き声は産声にはじまり、その後数ヵ月間、乳児の内的情報を伝達する最も顕著な行動といえる¹⁾。

乳児は、泣くことによって自分のニーズ(空腹、痛み、不快等)を母親に伝えるが、母親が児の泣き声に適切に対応できないと、育児不安が増大し、適切な育児行動の喚起を妨げ、やがて育児ノイローゼに陥る可能性がある。したがって、母親が児の泣き声に適切に対応できるよう母親をサポートしていくことが重要である。

乳児の泣きに関するこれまでの研究には、泣き声のタイプの音声学的分析²⁾や、ダウン症などの医学的な問題のある児の泣き声の特徴³⁾などが提示されている。しかし、児の泣き声を聞いたときの母親の感情や対処行動については十分に分析されていない。また、児の泣きに対して母親がどのように適応していくようになるのか、という点については明らかにされていない。

そこで、児の泣き声に対する母親の感情や、母親がどのようにして児の泣きの意味をみきわめていくようになるのかを明らかにし、援助に役立てたいと考えた。これまでに、出生後1週以内と生後1ヵ月時点での児の泣き声に対して母親がどのように受けとめているのかを質的に探ってきた^{4) 5)}。今回は引き続き、同対象の生後4ヵ月における児の泣きに対する母親の受けとめについて質的に探り、生後1ヶ月時までの母親の受け

とめと比較することを目的とした。

II 方法

調査対象：金沢市内の病産院にて、出生した正常な新生児をもつ母親13名

調査方法：生後4ヵ月頃に、母子の自宅を訪問し、児の泣き声についての受けとめや感情、対処行動について半構成的に面接を行った。面接内容は、承諾を得て録音し、逐語録をおこした。

分析方法：逐語録をもとに質的研究者複数で内容分析を行った。

III 結果

1. 対象の概要

母親の平均年齢は26.5歳(24～30歳)。初産婦8名、1経産婦5名。一人当りの面接所要時間は、30～70分間を要した。

2. 児の泣き声に対する母親の反応

児の泣き声に対する母親の反応には、①感情・情動反応、②認知的反応、③泣きの解釈、④児の要求を満たすための行動、⑤児一般の泣きに対する思い、⑥児の性格・気質の感じとり、の6つのカテゴリーがあげられた。

以下に、各々のカテゴリー別に、生後1ヵ月までの母親の反応と比較する。(表1)

<感情・情動反応>

母親は、児の泣き声を聞くと「いとおいしい」、「かわいい」、「うれしい」などの愛着を伴うような感情や、「また泣いた」、「泣いてばかり」、「じゃまくさい」などのどちらかといえば児に向かう気持ちが退くような感情を示した。これらの反応は、1ヵ月時でもみられたが、4～5ヶ月時点でも同様の感情を持続していた。

<認知的反応>

経産婦の母親の多くは、児の泣き声を聞くと「あっ、(私を)呼んでいる」と、児からの合図として受けとめており、出生後早期から同様の反応を継続して示していた。

<泣きの解釈>

泣き声を聞いた母親は、過去の経験(授乳時間、児のしぐさ・泣き方の特徴)に照らし合わせて、そろそろおっぱいね、眠くなってきたのね、というように児の泣きの意味を解釈していた。生後1ヶ月までの児の泣きの解釈は「おっぱい」、「おむつ」、「眠い」などの基本的欲求、特におっぱい中心であったのに対し、4～5ヶ月時はおっぱいがほしくて泣くという受けとめは減少していた。加えて「遊んでほしい」、「一人にしないでほしい」、「思い通りにならない(動きたいのに動けない、おもちゃがとれない)」など、泣きの解釈が多様になっていた。初産婦においては「たまになぜ泣いているのかわからない時はあるけど、だいたいわかるようになった」と表現され、1ヵ月時の「はっきりわからない、なんとなく」に比べ児の泣きの解釈にとまどいや混乱が少なくなっていた。

<児の要求を満たすための行動>

母親は、泣きの解釈に基づき「おむつをかえておっぱいを与える」、「だっこしてあやす」、「散歩に出る」、「おもちゃで遊ぶ」、「寝かせる(添い寝する)」などの行動をとっていた。また、初産婦においては1ヵ月頃までは児が泣けば「どうしたのかしら?」とすぐに何らかの行動が試みられていたが、この時期になると解釈された泣きの

意味によっては「少しぐらい泣かせておいても大丈夫」と、児の泣きに対する「待ち」がみられるようになっていた。

<児一般の泣きに対する思い>

児一般の泣きに対する思いとは、一般的に赤ちゃんとはどういう時に泣くものと母親がイメージしていることをさしている。初産婦の中には、児が生まれる前までは、赤ちゃんとは「おっぱいが欲しいときだけ泣くもの」ととらえていた母親や「いつでも泣くもの」、「おっぱいが欲しい、おむつが濡れて気持ち悪いなど、何らかの要求があった時に泣く」ととらえていた母親がいた。「おっぱいが欲しいときだけ泣くもの」ととらえていた母親は、我が子の泣きを通して「全然違っていた」と語り、また「おっぱいか、おしっこか、眠いときに泣く」というとらえ方をしていた母親でも「甘えるというのはわからなかった」と語り、予想していた児が泣く理由と現実の児の泣きに対処して経験したことから、児の泣く理由に様々あるという経験から泣きに対する解釈の仕方を一部修正していた。「いつでも泣くもの」ととらえていた母親や経産婦においては、「想像していた通り」、「こんなもの」と語り、現実とのずれを感じていなかった。

<児の性格・気質の感じ取り>

児の泣きの頻度によって、あまり泣かない方だと捉えている母親は、児のことを手がかからない楽な子、いい子と語り、すぐよく泣く方だと捉えている母親は、児のことを泣き虫、甘えん坊と語った。このように、泣きの特徴から児の性格・気質を母親は感じ取っており、このような反応は出生後早期から母親にみられ、4～5ヶ月時点でも継続してみられた。

3. 児の泣き声に対する母親の反応のプロセス

生後4～5ヶ月児の泣きに対する母親の反応のプロセスは以下の様であった。わが子の泣き声を耳にした母親は「いとおいしい」、「かわいい」などのpositiveな感情や「また泣いた」、「じゃまくさい」などのnegativeな感情・情動反応、また

は「呼んでいる」という合図としての認知的反応を示し、同時に泣きの解釈がされ、その解釈に基づき、児の要求を満たすための行動がとられていた。そして、児が泣きやむ、泣き続けるという児の反応から、母親は自分の対処の仕方や泣きの解釈が妥当であったかどうかを判断し、児が泣き続ける場合に再び泣きの理由を探り直して、泣きやむ為の次の行動をとるといった対処の仕方を展開していた。このようなプロセスを通して、母親は我が子を生む前に抱いていた児一般の泣きに対する思いをもとに、自分の子はよく泣く方であるとか、あまり泣かない方であると感じ、わが子を泣き虫、甘えん坊や手のかからない楽な子という児の性格・気質の感じをしていた。

これらの母親の反応のプロセスは生後1ヵ月時までとほぼ同様であった。

IV 考察

以上、生後4～5ヵ月児の泣き声に対する母親の反応と生後1ヵ月時までの母親の反応を比較した結果、生後4～5ヵ月時に特徴的と思われることに<泣きの解釈>がしやすくなった点があげられる。そこで、<泣きの解釈>とそれに関連している<児の要求を満たすための行動>、<児一般の泣きに対する思い>から考察する。

1. 泣きの解釈について

生後1ヵ月までの児の泣きの解釈⁵⁾は、おっぱいを中心とした、おむつ、眠い、甘えなどの基本的欲求であったのに対し、今回の4～5ヵ月時の分析では、おっぱいが欲しくて泣くという解釈が減少していた。これは4～5ヶ月という時期に入り、離乳食が開始されたことにより、児が空腹で泣くに至る前に、ほぼ時間を決めて離乳食が与えられているためと考えられた。このことは、1ヶ月時においては、前回の授乳時間から予測した時間が基準となり、まずおっぱいを欲しがっている泣きかどうか判断され、加えて泣き方の特徴から児の要求を見極めようとした結果、特におっぱいの泣きが他の泣きと区別され、見極められつつあったことが関係している。つまり、空腹になる時間の予測と児の様子から児が空腹で泣く前に、

母親が空腹を察知し対処しているため、おっぱいを欲しがるといふ泣きであるという解釈の仕方が減少したことに結びついていると考えられた。

また、4～5ヶ月時においては「遊んでほしい」、「一人にしないでほしい」、「思い通りにならない(動きたいのに動けない、おもちゃがとれない)」など、泣きの解釈も多様になってきた。これは児の運動機能の発達や情緒の発達に伴い、児の要求が何であるかが児の表情や動作、しぐさを通して母親により目で見えてわかりやすくなってきているためと考えられる。

2. 児の要求を満たすための行動について

生後1ヵ月頃までは、母親は児が泣けば「どうしたのかしら?」とすぐに何らかの対処行動が試みられていたが、1ヵ月以降は解釈された泣きの種類によっては「少しぐらい泣かせておいても大丈夫」と、児の泣きに対する「待ち」がみられるようになっていく。これは、解釈された泣きの意味が生命の危険をはらむような切羽詰まった泣きではないことをそれまでの児の接触を通して(おっぱいでもない、おむつでもない、さっきまで抱いていた)感じ取っているためにできる余裕の証とでもいえるのではないだろうか。

3. 児一般の泣きに対する思いについて

児が生まれる前まで、赤ちゃんとは「おっぱいが欲しいときだけ泣くもの」ととらえていた母親は、我が子の泣きを通して「全然違っていった」と語り、また「おっぱいか、おしっこか、眠いときに泣く」というとらえ方をしていた母親でも「甘えるというのはわからなかった」と児が泣くということに対して抱いていた思い(解釈)に修正がみられている。このことはイメージしていた児と現実の児とのギャップを感じ、今までのイメージを修正することで、現実の児をそのまま受け入れられるようになっていくのではないだろうか。

V 結論

今回、生後4～5ヵ月児の泣き声に対する母親の反応について質的な分析をした結果、以下の点が明らかになった。

1. 児の泣き声に対する母親の反応として、<

感情・情動反応>、<認知的反応>、<泣きの解釈>、<児の要求を満たすための行動>、<児一般の泣きに対する思い>、<児の性格・気質の感じとり>の6つのカテゴリーが上げられた。

2. 生後1ヶ月までの母親の反応と比較すると、泣きの解釈が多様になり、同時に泣きに対して「待ち」がみられるようになった。さらに児一般の泣きに対する思いを一部修正しながら対応していた。

引用文献

表1. 泣き声に対する母親の反応

カテゴリー	内容 (生後1ヵ月まで)	内容 (生後4~5ヵ月)
感情・情動反応	<ul style="list-style-type: none"> ・うれしい ・かわいい ・いとおいしい ・しあわせな気分 ・また泣いた ・もう泣いてばかり 	<ul style="list-style-type: none"> ・うれしい ・かわいい ・いとおいしい ・しあわせな気分 ・また泣いた ・もう泣いてばかり ・じゃまくさい ・かわいそうに
認知的反応	<ul style="list-style-type: none"> ・あっ！呼んでいる 	<ul style="list-style-type: none"> ・あっ！呼んでいる
泣きの解釈	<ul style="list-style-type: none"> ・どうしたのかな？ ・おっぱいかしら？ ・おむつかしら？ ・だっこしてほしいのかな？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・おっぱいがほしい ・おむつかえてほしい ・うんちしたい ・眠い ・だっこしてほしい ・遊んでほしい (かまってほしい) ・一人にしないでほしい ・思い通りにならない (おもちゃがとれない) ・今の状態が嫌になり、別のことをしたい ・機嫌が悪くなった ・暑い
児の要求を満たすための行動	<ul style="list-style-type: none"> ・児を抱く ・おむつをみてとりかえる ・声かけする ・おっぱいを含ませる 	<ul style="list-style-type: none"> ・児を抱く、だっこして歩く (散歩に出る)、ゆする ・おむつをみてとりかえる ・声かけする ・おっぱいを含ませる、おやつを与える ・寝かせる、添い寝する ・おもちゃで遊ばす、上の子と遊ばす ・ほおっておく
児一般の泣きに対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・おなかがすくから、おむつが濡れたから、だっこしてほしいから、など何らかの理由があるから泣く ・特に理由がなくても泣く ・いつでも泣く 	<ul style="list-style-type: none"> ・おっぱいがほしい時にだけ泣くものと思っていたが、現実には全く違う。おっぱいより嫌なことで泣くことの方が多い。 ・おっぱい、おむつ、眠いなど理由があるから泣く、いつでも泣くものと思っていたので、現実との違いはない。 ・甘えて泣くというのはわからなかった。 ・特に理由がなくても泣くことがある。 ・泣くとかわいそうだから、早く何かしてあげようと思っていたが、今は少しぐらい泣かせても大丈夫と思える。
児の性格・気質の感じとり	<ul style="list-style-type: none"> ・ききわけのいい子 ・あまり泣かないおとなしい子 ・むずかしい子 ・泣き虫な子 ・元気な子 	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり泣かない、手がかからない楽な子、夜寝てくれるから楽な子 ・マイペースな子 ・わがままな子 ・泣き虫、甘えん坊、あまり寝ない子 ・きかん気がある元気な子 ・心配になるくらいすぐ寝る子 ・我慢強い、辛抱強い子、やさしい

- 1) 竹中和子：乳児の泣きと乳児-保育者相互作用，日本赤十字看護大学紀要，1992.
- 2) Wasz-Hockert, et al. : The infant cry: a spectrographic and auditory analysis. 1968.
- 3) 大井 照，馬場一雄：泣き声と表情，改訂小児生理解学，へるす出版，1994.
- 4) 田淵紀子他：新生児の泣き声に対する母親の受けとめ方，日本助産学会誌，10 (2)，pp. 81-84，1997.
- 5) 田淵紀子他：生後1ヶ月児の泣き声に対する母親の反応，日本助産学会誌，11 (2)，pp. 122-125，1998.